

(日置郡吹上町中ノ里字白寿)

位置と環境

伊作川を北側に見下ろす標高約15mのシラス台地上にある。

調査の経緯

シラス採取に伴い、昭和53年（1978）に鹿児島県教育委員会が発掘調査したほかに、河口貞徳、辻正徳らによって昭和50年と53年にも小規模の調査が行われている。

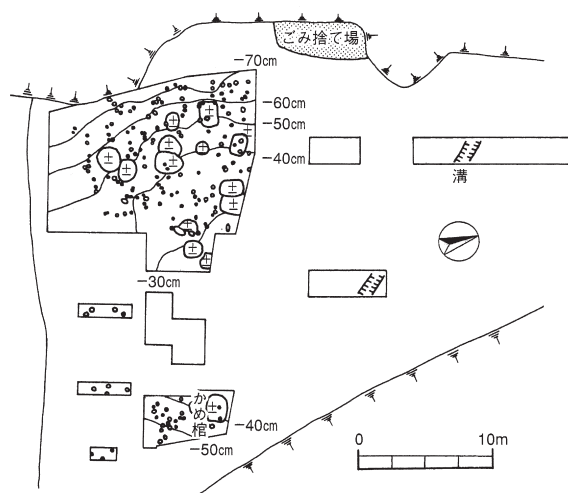
遺構と遺物

縄文時代後期と弥生時代の複合遺跡である。

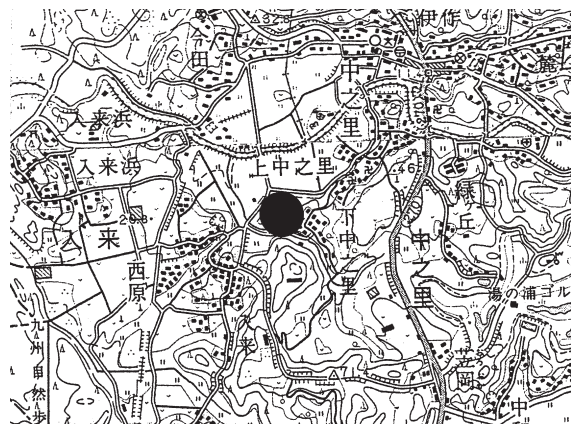
縄文時代後期の遺構は多くの土坑と柱穴が発見されている。台地の端には土坑が13基あり、切り合っているものもある。平面形は円形・楕円形・隅丸方形があり、大きさは1m×1.5mの小さいものから、



写真1 土坑



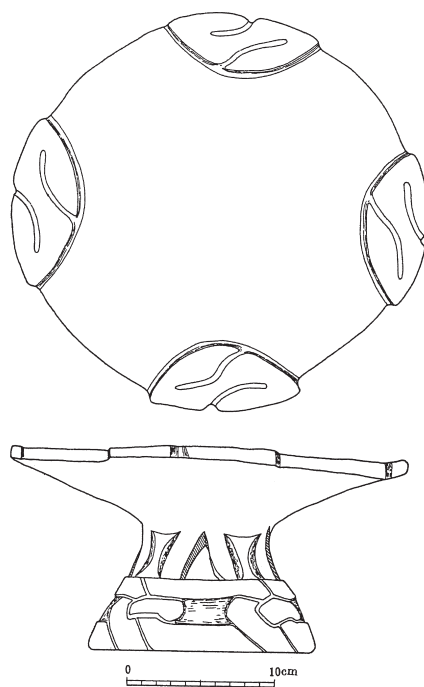
第2図 遺構分布図



第1図 白寿遺跡の位置

1.5m×2mのものまであり、深さは10cmから50cmのものまでである。断面が袋状を呈するものもある。台地中央部にも直径1m、深さ90cmの土坑があり、4個の三角形透しのある台と、4個の葉状肥厚部の皿部からなる完形の台付皿形土器や管玉などが出土している。柱穴は多く出ているが、まとまりはつかめなかった。台地北西隅斜面には多量の土器などからなるゴミ捨て場も確認されたが、調査前に破壊されたため詳細は不明である。

土器は市来式土器を主体として、草野式・北久根山式土器などが出土している。石器は磨石・敲石・石皿・十字形石器などがある。



第3図 台付皿形土器

弥生時代前期から中期の甕棺・壺棺が出ている。甕棺は、68cm×85cmの略方形をした土坑に高さ53cmの甕が横向きにぎりぎり置かれていた。蓋が見つかっていないため、木製のもので蓋をしていたものと思われる。壺棺は、不正円形の土坑にやや斜位に置かれ、蓋の鉢は壺の中に落ち込んでいた。壺は高さ47.5cm、最大径47cmで、底の近くに穴があいている。鉢は口径30.5cm、高さ19cmで口縁近くに断面三角形の貼付突帯が見られる。甕棺が中期後半、壺棺が前期末のもので、副葬品はなかった。台地上には大きな扁平な石もあることから支石墓の存在も考えられる。

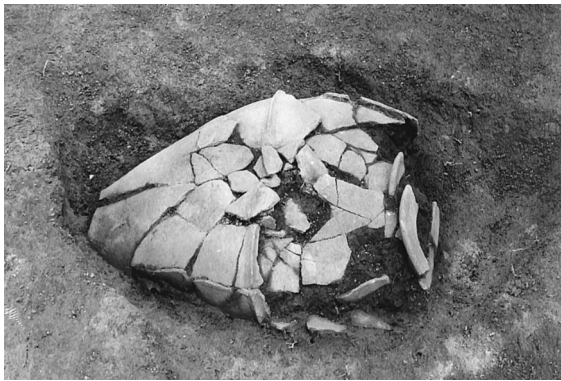


写真2 甕棺出土状況



写真3 壺棺

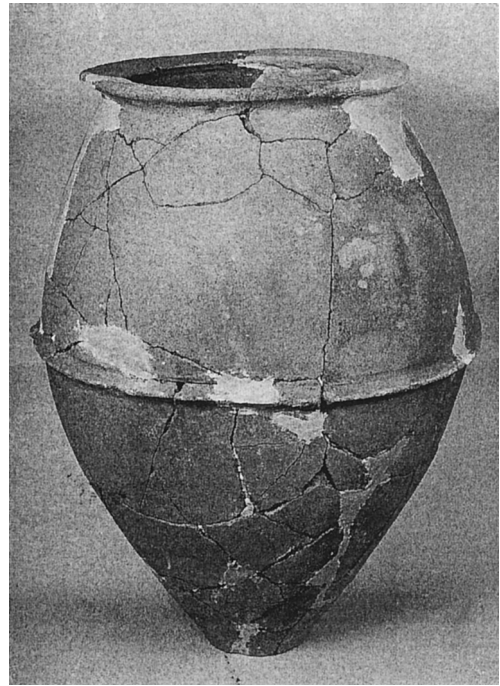


写真4 甕棺

ほかに入来式土器の甕形土器・軽石・礫の入った直径約1m、深さ8cmの土坑もある。幅1mの溝もみついているが、時期がはっきりしない。

特徴

- ・南九州では発見例の少ない縄文時代後期の集落跡で、土坑と台地端のごみ捨て場からなる。
- ・弥生時代中期の墓地は、谷を挟んで向い側の台地にある入来遺跡の集落との関連を伺わせる。
- ・甕棺・壺棺あるいは支石墓の存在は、南九州では特殊なありかたで北九州との深い関係を伺わせる。

資料の所在

出土した遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターおよび吹上町歴史民俗資料館に保管されている。一部は、上野原縄文の森展示館や吹上町歴史民俗資料館に展示されている。

参考文献

河口貞徳1976「器台付皿形土器」『鹿児島考古』第11号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1983「白寿の壺棺」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会

(池畑耕一)